

「北海道大好きな旅」

その3

essay

小学校、留年!?

食農わくわくねつとわーく北海道

事務局 長尾 道子



この春、小学校に入学した。十月で卒業なのだが、出席日数は足りない超不真面目小学生だったので、留年することになりそうだ。

◆ ◆ ◆
私が入学した小学校は由仁町にある「農業小学校」。農家である三田村さんがはじめた取り組みである。校長の三田村さんを以前から知っていたので応援したい

気持ちと、どんな人たちが入学してくるのかという好奇心、そしてなんちゃってなのだが庭いじりをはじめたので、少しは農家である三田村さんに農作業のハウツウを学びたい!というまじめな気持ちから入学を決めた。

◆ ◆ ◆
とはいうものの、元来怠け者の私が年に十数回、毎朝一〇時までには由仁町へしっぴり通えるかどうかちよっぴり不安でもあった。昨年もある畑を借りたのだが、見事に行けず(行かず?)に枝豆を口にすることなく、草の成長に打ち勝つことが出来ないまま、すべて小さな大豆にしてしまった前科があるのだ。



ながおみちこ さん

藤女子短期大学卒
平成4年ホクレン入会
平成7年より6年間、PR誌
「Green」の編集業務を担当
現在「食農わくわくねっとわー
く」事務局長

それに自宅には

小さいながらも畑がある。今はひとりで暮らしているので、母の管理下にある畑も結局は私が面倒見なければならぬ。これがまた、結構な重労働なのだ。

本当に大丈夫なのか？入学願書を書きながら考えていた。そんな時、ふと「ま、たまに由仁へちよつとした旅をしていると思えばいいのかも！」と頭に浮かんだ。

◆ ◆ ◆
そうだ、そうしよう！…それからすぐに、申し込んだ。

◆ ◆ ◆
翌週、小学校から分厚いお便りが送られてきた。中には



お手紙やカリキュラム表、農具一つ一つを説明したもののなど、内容がみっちりしていて、それはそれはとても手の込んだものであった。農作業で忙しい中、相当な手間をかけていろいろな人たちと交流しているという三田村さんの思いは、のほほんと過ごしていた私に大きな感動を与えてくれた！

◆ ◆ ◆
由仁へ行くのが楽しみで仕方なかった。

◆ ◆ ◆
初日、私は今年から長沼町で援農している友人を誘って由仁町へ向かった。午前中は自己紹介。どんな人がいるの



せっせとみんなで土作りもどさ？



校長の三田村さん
とっても熱心でやさしい方です

か、二人でわくわくしていた。二〇人近いメンバーは、芦別から先生と通っている本物の小学生がいたり、子供連れの家族や新婚夫婦、雑誌編集長や元農家のお父さんなどなど、これだからとっても楽しみな、多種多様な顔ぶれだった。

そして午後からは種まき。

校長手作りの堆肥を撒いた後、二人で出来あがったときのメニユーまで考えて、畳三枚分ほどの畑に一〇種類位の種を蒔いた。特に私は、夢である「畑でお湯を沸かし、枝豆を摘んですぐ茹でてビール片手に味わう」ために、多めに大豆を蒔いた。んゝ楽しみ！帰りは道の駅へ寄ったり、写真を撮ったり…旅というには

ちょっとはばかられるのだが、「なんちゃって旅」を思いっきり満喫した！

◆ ◆ ◆

校長が一生懸命スケジューリングをしたのだが、今年は天候に恵まれなかった。私自身もスケジュール調整がうまくいかず、欠席が続いた。結局、作物の収穫適期も逃し、枝豆の夢も泡と消えた。ラディッシュも野球ボールの大きさに育ってしまった。アカザも思いっきり成長し、三田村さんの息子さんに「長尾さんの畑は何だかちょっとヘンだね」といわれてしまった。

◆ ◆ ◆

でも、少ないながらも由仁への「なんちゃって旅」はと



2ヵ月後
雑草と共にすくすく育つ野菜たち



真ん中のまるいのは巨大ラディッシュ
味は・・・でした

でも思い出深いものだった。自分たちの食べるものを作る。これを通じて、年代や性差を越えた人と人とのつながりの場を校長は提供してくれたのだ。また、草が茂る畑と一緒に草取りしてくれた校長の息子さんとの会話

や収穫された野菜を妹の家まで届けた時の気持ち、収穫した野菜を調理して友人を招いたときの楽しかったこと…留年は、自ら進んでお願いしようと思っている。

◆ ◆ ◆
旅は本当にいろいろなことを教えてくれる。未熟者の私にとって、「旅」は地域や自分を知る貴重なものだ。

実は・・・この原稿を書いている今も、旅の途中。南のある島で、汽笛を聞きながらアジやタコを味わい、地元のおじさんおばさんと大いに語りあう。皆さんも、こんな旅してみませんか？

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪